

第26回日本がん登録協議会学術集会報告

寺本 典弘 専門委員／第26回学術集會会長

四国がんセンター



日本がん登録全国協議会・第26回学術集會は盛會のうち
に終了することが出来ました。

総勢320名の方々(除く:スタッフ)にご参加いただきました。協議会や国立がん情報センターの皆さんには開催に当たって指導とご協力をいただきました。また、患者会の方々とは一緒に企画が出来て、学術集會の意義が大きくなったと思います。塩崎先生には受動喫煙対策の激闘の中、大回りをしてまで会場に駆けつけ、熱い講演をいただきました。秘書の皆さんは講演前後のスケジュール調整が大変だったものと思います。皆さん、本当にありがとうございました。愛媛県・県医師会・四国がんセンターの方々は、引き受けから終了まで流動的だったこの集會を献身的に盛り上げていただきました。主催者側ではありますが、ここにも感謝を記載したいと思います。



塩崎厚生労働大臣と記念撮影

学術集會は参加者が主役です。ことに今回の集會の主な目的の一つは“坩堝(るつぼ)“を作ることでした。坩堝とは『高熱を利用して物質の溶融・合成を行う際に使用する湯のみ状の耐熱容器』です。転じて、様々な要素が一つになって新しいものが生まれる場所という意味になります。学術集會に新しい参加者を呼び込み、互いにどんな人がいて、どんなことを考えているかを互いに知ってもらい坩堝を作ろうと思いました。多数の演題が集まり、情報交換を目的としたポスターセッションを2回に分けて行いました。この学術集會で、つながりやアイデアが新しく生まれたなら、主催者としては大変光栄です。➤

もう一つの目的は、新しい協議会のあり方を探ることです。それをテーマとしたシンポジウム『new missions, a new hope』は細部には問題があったものの、多くの方から意見が出て総合討論が大変盛り上がり、協議会に多くの宿題が生まれました。引き続いて、全国がん患者団体連合会との調印式があり、院内がん登録を対象に入れること、患者会と協力していくことなど協議会の新しい姿が見えたのではないかと思います。今回の集會は過渡期で有り、参加人数が読めなかったため、一般や患者会の皆さんへの公開を制限せざるを得ませんでした。しかし、今回をきっかけにその点も大きく変わると期待しています。

3つめの、そして最大の目的は楽しんでもらうことでした。私の考えでは、学術集會と言うものの本質は発表や研修ではありません。そんなものは論文作成や研修会や本、インターネットで代用出来ます。『仕事の区切りとなる楽しい集まりがあることで、その学術分野に求心力が生まれ、発展する』と言うことが学術集會を開く本質だと思います。宴会が楽しいのは勿論、発表や聴講も楽しいものを目指しました。私自身としては、主催側だったので、気を抜く暇がなく、毛穴の底までは楽しめませんでした。次回に期待したいと思います。



毛穴のある主催者：
愛媛県職員みきゃんと
四国がんセンター医師
のりっくま

次回は、沖縄でお会いしましょう。皆様にごいただいたアンケートの結果は次にかかされると思います。今度はスーツと夏着物とアロハと着ぐるみではなく、かりゆしと浴衣で参加しようと思います。

平成29年6月吉日

第26回学術集會会長 四国がんセンター 寺本典弘